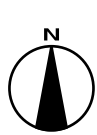


地質から学ぶ甲突川の 防災みて歩きMAP



「シラス」とは？

「シラス」とは火砕流堆積物のことで、語源は「白砂」または「白洲」が鹿児島弁になまったものとされています。

今から約25000年前、現在の鹿児島湾奥部で大噴火が起きました。(始良カルデラの形成) そのときに発生した約800度の火砕流は、南九州一円を覆い、人吉盆地や宮崎平野、遠くは東北部まで降下しました。特に南九州は、厚いところで100mも堆積し、そこに生息していた動植物は壊滅したとされています。これが

「シラス台地」形成の起源です。

「シラス」は、自然状態では長年の圧縮や高熱によって強固結(場所によっては溶結)しており少々の衝撃では崩壊することはありませんが、雨水の浸食には極めて弱いという性質をもっています。そのため水の浸食は崖を形成し、もともとは厚く堆積した台地も削られて後退することになります。こうしてシラス台地の周辺には崖や谷が形成されるのです。



甲突川は、鹿児島市の郡山町、八重山を源にして、市の中心部へと流れる延長約20キロ、流域面積約105km²の川です。流域の大部分は、源周辺の山地を除いてほとんどがシラスで覆われた台地の谷に沿っており、また湧水比流量(晴れの日と雨の日の流れる水量の差)が極度に大きいことからシラス河川と呼ばれています。

鹿児島のまちは、甲突川が運んできた土砂によって形成された沖積平野に広がっています。特に江戸時代以降は、海岸部の埋め立てが進み、まちは拡大していきました。明治時代以降は、田んぼだった谷底の平野部にもまちが形成され、さらに戦後には台地の上にも大規模な団地が造成されるようになりました。こうして、甲突川流域にまちは広がり、人口が増加することになりました。

江戸時代以前、流路はこのあたりから南東に向かっていました。